

先に大きな可能性が見えているからである。一つは今のところ、食品と金融という二つの領域が突出しているものの、教育産業やツーリズムまで含めた他の多くの領域にも拡大し、将来的には人々の生活の全方位に広がる事が予想される。もう一つは、人々が商品のハラル性あるいはイスラム性を認める基準は必ずしも豚や酒、あるいは利子の不在だけではなく、たとえばその商品の売り上げが慈善のために使われるなど道徳的な基準というものもあり、実際にそのような意味でイスラム性を訴える商品も生まれているからである。これには現在、世界各地で注目を集めているロハスやエシカル消費といった考え方と重なるところがある。つまり、商品を通して一つの信念や理想の下に生産者、販売者、そして消費者がつながる。日々の消費という行動を通して自らの信念を社会に訴えるという行為である。

この可能性を考慮に入れば、「ハラル・ビジネス」の台頭について、それをイスラム性がグローバル・ビジネスの論理によって変容を迫られたと見るだけでなく、一人ひとりのイスラム教徒を社会とつなぐ新しいチャンネルが生まれたと見ることもできるのである。

F・シュオンとW・C・スミス

中村廣治郎

F・シュオン(一九九八没)とW・C・スミス(二〇〇〇没)の対応関係についてはすでに種々指摘されてきた。ここでは前者の「esoterism」や「exoterism」、後者の「faith」や「tradition」の対概念について考える。シュオンによれば、宗教の現実態は

様々であるが、それらの言説を超えた主客未分の超越的な無文節的本質・「秘教」(esoterism)においては同一である(「超越的同一性」)。この本質、つまり「超存在」(Beyond-Being)が「存在」(Being)のレベルをへて現象世界に顕現する。これを「顕教」(exoterism)と呼ぶ。「顕教」とは、「秘教」を言語や象徴によって表現したもので、「伝統」(tradition)とも呼ばれる。人間はこれまでいずれかの伝統に帰属することで真理との関係を維持してきた。

他方、スミスによれば、「religion (religio)」は、元々、「恐ろしい力、それに対する人間の感情・敬虔」を意味していたが、近代を経てその概念内容は変化し、教義・儀礼・組織・共同体へと実体化され(reify)、またそれらの包括的名称となった。さらに近代の世俗化の流れの中で、religionは人間に本質的なものではなく、自由を選択可能な中立的存在となった。これは本来のreligionの逸脱であり、この語をそのまま使用することは、この逸脱を容認し、宗教の正しいあり方・理解の道を閉ざすことになる。そこでスミスは、それに代わる語としてfaithとtraditionを提案する。Faithとは、「(超越への)信仰・帰依」という普遍的な人間の資質であり、それを表現し、保持・育成するものとして集積され、伝達されたものの総体がtraditionである。両者は不離の関係にあるが、中心はあくまで人間のfaithにある。Faithとは、このtraditionが当事者にとってもつ意味なのである。

以上のような類似点も、より深くみれば違いも目立つ。まず、esoterismとfaithについてみると、前者の顕現に階層構

造がみられるのに対して、*Faith*については、その対象である「神」は人知を超えたものとして、また人それぞれに應じて多様であるとして、その概念内容に踏み込むことはない。中心はあくまで人間の側にある。「伝統」についても、シユオンの場合、それは遠い過去に由来する聖なる伝統として「与えられ」、固定したものとみられる。他方、スミスにおいて「伝統」は、歴史的に捉えられ、人間の創造的解釈によって変化し、常にプロセスの中にある。

その背景に何があるのか。「永遠の哲学」の教祖的存在であるルネ・ゲノンによれば、西洋では近代文明によって伝統の聖性は破壊され、究極の真理への到達は不可能になり、東洋で直接導師に指導を仰ぐしかない。こうして形成された西洋エリート集団の次になすべきことは、失われた西洋の伝統的文明を復活することとなる。

他方、スミスの究極的狙いは、「世界神学」(*world theology*)の構築である。これは、グローバル社会の到来により、諸宗教はもはや自己の排他的正当性を主張することは不可能となり、相互に正当性を認め、理解し、平和的に共存するしかない、との認識から出たものである。彼はそれを「比較宗教の神学」(*theology of comparative religion*)とも呼ぶが、それは従来「宗教の神学」(*theology of religions*)の枠をはるかに越えるものである。

そこでは、人類は一つの共同体と考えられ、すべての宗教も一つの大きな流れの一部とみられる。各宗教は従来のようにその個性を保持しながらも、一つの大きな人類宗教史の一分枝と

なる。むしろ、そのためには、各宗教は従来の特権主義を改める必要がある。そのような営みを相互に正しく理解するには、伝統の歴史を学問的に正確に認識するだけでなく、それが現在当事者たちにどのようなように解釈されているのかを、対話によって知るしかないし、その意味で理解の当否は当事者の判断に仰ぐしかないのである。

#### コプト教会と総主教——シユヌーダ三世の果たした役割——

岩崎 真紀

二〇一二年三月、エジプトの宗教的マイノリティであるコプト・キリスト教(コプト正教会)の第一七代総主教シユヌーダ三世(一九二二—二〇一三)が逝去した。エジプト総人口の一〇〜一五%を占めるコプト・キリスト教徒に関しては、雇用や昇進、宗教実践などに関する差別がある一方で、一九五二年革命以降は有力な政治家や団体が存在しないため、教会の長である総主教は、宗教面における指導者であるだけでなく、政治、社会、経済などあらゆる側面に関するコプト正教会ひいてはエジプトのキリスト教徒全体の実質的なスポークスマンとしての役割を担っている。そして、それはとくに社会変動の大きいこの四〇年間総主教を務めたシユヌーダ三世に当てはまる。本発表では、シユヌーダ三世の生涯を概観しつつ、インタビュー調査の結果からコプト民衆にとってシユヌーダ三世とはどのような存在であったのかを明らかにした。

シユヌーダ三世は一九二三年アスユート県に生まれた。大学卒業後はコプト復興運動の中心的担い手であった日曜学校運動